

## 大隅半島佐多のネンブツ資料

松原武実

大隅半島南端の南大隅町は平成一七年に根占町と佐多町が合併してできた自治体である。南半分を占める旧佐多町は藩政時代の佐多郷と重なっている。佐多郷は麓を中心とする西海岸沿いの伊座敷(いざしき)村、東海岸北半の辺塚(へつか)村、その南隣の郡(こおり)村、中央の台地部から南端佐多岬までの細長い馬籠(まごめ)村(もと山崎村)の四ヶ村からなっていた。戦後しばらくの頃まで、一部の集落にて盆期間中にネンブツ(念仏)を唱えてまわる行事があった。地元ではネブツとかネブチと発音され、主要にはサン(和讃)を唱え、その合間に呪文や念仏が挿入されるという形だったようだ。集落単位でも、おもに青年によって一団を組み、自分の集落だけでなく近隣の集落や、あるいは遠く離れた集落にも出かけたことが語られていた。

この念仏行事は当然ながら佐多郷にて独自に発生しかつ伝承されたものではなく、南九州全域でおこなわれていたものと見るべきである。とはいえ同様の行事はほかに見当たらず、大隅半島の先端にてかろうじて残存していたのである。南九州の古い盆行事の姿、および盆踊やカネ踊(太鼓踊)のルーツを考える場合に重要な事例であることはいままでもない。

私は昭和五八年から六〇年にかけて大隅半島の芸能を悉皆的に調べて歩く中で経験者と出会い、詞章をメモした手帳を実見するなどしたものの、『南九州歌謡の研究』(松原一九九三)の中で「佐多の念仏」

として報告しただけで、考察を怠ったまま歳月が過ぎてしまった。内容を分析して論ずる力は今もって持つに至っていないが、ほかにもいくつか書き留められた、しかしほとんど目に触れられることのない報告があるので、これらをまとめて提示することで、全国諸氏による研究のための資料とすることを企図してここに掲載する。令和四年末の時点で前述の拙著も含め、報告類は次の四点がある。刊年順に記す。

A 米原正晃「佐多の念仏聞書」昭和五三年～昭和五五年。

『鹿児島民俗』(鹿児島民俗学会) 六八号～七一号所収。

B 松原武実「佐多の念仏」平成五年。

『南九州歌謡の研究』(第一書房) 所収。

C 尾崎潤子「大隅半島の盆行事」平成六年。

『テーマ学習のあしあと』(甲陵高校) 所収(注1)。

D 下野敏見編『佐多町民俗資料調査報告書(一) 佐多町の民俗』

平成七年、佐多町教育委員会。

中でもCは高校生のレポートながら、現地取材に基づいた詞章の採録を含む秀逸の内容である。鹿児島県立図書館にも所蔵されている

キーワード…念仏、和讃

い。Dは下野敏見が鹿児島大学法文学部教授時代の平成三年、文化人類学教室の学生や院生を率い、県外の研究者も交えておこなった現地調査のレポート(注2)で、内容は歴史・民俗・社会の全般にわたる。今では聞くことのできない年配者からの聞き取りが収録されている。その中に盆行事や念仏に関する話が何ヶ所かに記載されている。

以下A B C Dの内容を摘記する。詞章を記録しているのはBとDである。念仏行事を理解するためには詞章の分析は欠かせないので再掲する。

### 一 米原報告(瀬戸山・西方・古里)

前掲A「佐多の念仏聞書」を要約する。念仏は旧伊座敷村の西方・瀬戸山、旧郡村の上村・坂元・古里・竹之浦などにて大正末頃までおこなわれていた。青年たちが一団を組み、盆の一日と一五日、集落内だけでなく手分けして他集落にもでかけた。人々は一団をネブドンと呼んで畏怖した。畏怖の例として次のような伝承がある。ある時、馬籠の武士がネブドンの通行を邪魔したところ、念仏を唱えてその武士の手足をマヒさせ、念仏で回復させたという。また念仏は沖を通る船を止め、ぐるぐる旋回させることもできた。ネブドンはユカタを着てゾウリを履き、杖をつき、笠をかぶっていた。

報告では、旧伊座敷村の二集落と、旧郡村の一集落にて具体的に次のようなことを聞き取っている。

瀬戸山(旧伊座敷村)では二七(青年)は全員参加で、タナバタの日から厳しい稽古が始まった。休むと割木に座らされるなどの罰があった。普段は念仏を唱えると祟りがあるととして、決して口にしな

かったが、もし口にした場合「トネ」という納めの念仏があった。カネを叩くカネモチは一人。一団はサンを唱える四・五人の組と、ウタを唱える五・六人の組に分かれていた。まずウタ組が木戸口から入り、前庭の精霊棚に向かって「イチノキザ眺ムレバ、ヤヤモ見事ヤヤ見事、フタツキザ眺ムレバ、コ庭ノケイラン眺ムレバ、ヤヤモ見事」と庭をほめつつ進む。終わるとサン組は表の座敷に上がり、正座してネブツを唱える。初めに「仏呼ビ」の「ゴコツ」を言う。そしてサンを唱え、終わると水祭りをする。墓を通る時も同じで、文句を唱えながらミズノコを三回撒く。終わると「仏モドシ」の呪文を言うが、これを覚えている人はいない。退出の時に米をもらう。あとで売って素麺を買い、皆でいっしょに食べる。これを「ガキマツリ」といい、この時もサンを唱えた。カネの叩き方を間違えると祟りがあるというので後継者がなく、戦後しばらくして途絶えた。

西方(旧伊座敷村)では自集落だけでなく手分けして島泊・大泊・外之浦(とのうら)・竹之浦へも行つた。のちには頼まれた家だけに رفت。ネブドンは四・五人だが、十人ぐらいがついてまわって米袋やカネをもらう役をする。全員ユカタを着るが杖は持たず、笠もかぶらない。まず表の部屋に上がり、横に並んで座す。カネを叩く役は左足の膝を立てて腕をつけて叩く。夜通しなので眠くなる。眠気覚まし呪文があったが、覚えていない。

古里(旧郡村)では一団をネブドン(念仏ドン)という。先頭は水祭りドン。サン組とウタ組の区別はなく、サンの前にウタがつく。これをカシタウタ(またはカミウタ)という。カシタウタは五つあり、どのサンにつくか決まっている。各家をまわる前に(最初に)地蔵の前や天根神社(注3)境内でウタを唱える。これを「祭り出し」とい

う。各家に着くと、庭の真ん中に作られた精霊棚に文句を唱えながら水祭をする（棚にミズノコをあげる）。サンには「コハギサン」「ナナツゴサン」「ミズノサン」「クギノサン」「ボダイサン」「ホソナゴサン」などというのがあった。新盆の家では長いサンを唱えた。眠気覚まし呪文は「ネブツウタ」といった。最後に「祭り切り」を唱える。家からどのサンをやってくれと頼まれることもある。一節ごとにカネが打たれる。ネブツドンには精霊がついてまわるというので、家人は恐れ顔を出さない。終わるとお礼に米を少し渡す。「オーホイナ、オーホイナ、モード、モード、ナムアムドー」と唱えながら次の家にまわる。一軒でも抜かすことはできない。三ヶ所の墓地、荒神、内神、カナヤマ様などのそばを通る時も水祭りドンによってミズノコがあげられた。また水祭りドンは川を渡るとき、水たまりを通るとき、木戸口から入るとき、それぞれ異なった念仏を唱えた。これをカケネブツとかカケウタという。もし一軒でも唱え忘れがあると水祭りドンは腹痛をおこすので、そういう時は別の人と交代する。各家をまわったあと、再び地藏か神社の所にきてウタを唱えた。

## 二 松原報告（岩下・坂元）

前掲Bに旧郡村の岩下集落のサンが収録されている。昭和五八年から六〇年にかけて、大隅半島南部の芸能を調べるために旧郡村の岩下・坂元・川田原（かわだばる）・古里などをまわった。そこで遭遇したのが岩下在住の経験者の詞章のメモである（写真1と2）。幅七・五センチ、縦九センチの紙片を紐で綴じ、縦に開いてペンにて漢字交じりのカタカナで書き留めている。表紙（写真1）の左端に「溝端逸

男」とある。昭和参拾参年八月の文字が見える。このメモと遭遇したのは、近くの坂元集落在住の経験者（白川幸夫さん）を訪ねた時である。「大事な行事と思うけれど……」と言いつつ、復活の見込みはないという話だった。岩下でも坂元でも昭和三〇年頃が最後だったらしい。「中断が続くと詞章を忘れてしまうので、岩下の溝端逸男さんがメモをしていたので、それを借りてきた」という。

旧郡村は北西から南東に流れる郡川に沿った水田地帯と、南側の台地上の畑作地帯からなる。壇ノ浦のあと平家の末孫が、鎌倉幕府から許されてこのあたりの地頭職をもらい、家臣を従えて海路浜尻浦へ上陸し、郡川左岸の高木城を拠点としたという伝承がある（注4）。つまり旧郡村は佐多郷の中でもっとも古い地区と考えられている。

岩下集落は郡川に沿った北西の端に近い山裾にあり、旧馬籠村（大字馬籠）の区域が入り組んでいるが、おおかたは旧郡村に属する。坂元は郡川の中ほどの田園地帯にある。いずれも当時は三〇戸ほど。念仏の実修事情はほぼ同じで、詞章も共通していたようだ。

昭和三〇年頃までも毎年やるわけではなく、盆前の集落会にてやるかどうかを決めた。二〇人ぐらいの青壮年の男たち（普段着のまま）が旧七月一四日の夕方、いったん部落長の家に集まってから集団で各



写真1  
サンをメモした  
手帳の表紙

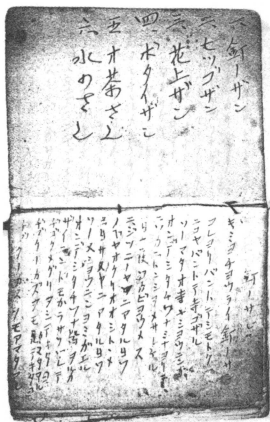


写真2  
上掲手帳の最初の頁

戸をまわり、カネを叩きながらサンを唱えた。全員が歌うわけではなく、カネを叩く役もあった。実際は四・五人が交代で歌った。これを「サンをひく」といった。ゆっくりしたカネの伴奏があり、歌わない人二・三人が交代で担当した。サンは何種類もあり、訪問先では希望するサンがあればそれをやった。どのサンも「キミヨウチヨウライ何々サン」で始まり「シヨクシンジヨウブツナミアミダ」で終わる。短いサンは数分、長いサンは三〇分近くもかかった。サンをひくと同時に各戸では水祭りというのをした。各戸の戸口の横の庭の一角にハナタテ（施餓鬼棚のこと）が設置され、上に花と線香が立てられ、お膳には米と水が供えられた。サンをひく間に、一人がハナタテのまわりに、水祭りの文句をブツブツ言いながら水を振りかけた。ハナタテは一三日か一四日に作り、花を供える。花は何でもよい。一六日に撤去する。移動の途中の墓や、橋のたもとやいわれのある場所でも止まって唱えた。水神は集落内にはない。各家は白米を一升か五合程度とオカネを少しくれた。一四日の夕方から始まって、夜中までかかって一戸も残さずやった。

たとえば岩下がやり、坂元がその年はやらないという場合、岩下は坂元の了解をとって出かけた。逆もある。竹之浦まで行ったこともある。他集落の初盆の家から、わざわざ来てくれと頼まれることもあった。こうした他集落への出張は、自集落をすませた日（一四日）の翌日（一五日）、夕方から始められるように出発し、夜通しでやり、一六日の明け方までかかることもあった。最後に公民館にてホトケモドシをした。

サンには「釘のサン」「ヤツハシサン」「菩提サン」「お茶サン」「ごやんサン」「あたまちサン」「七つ子サン」「こはぎサン」「水のサン」

「ほそなごサン」「花じよサン」などがあつた。

### 三 尾崎報告（瀬戸山）

前掲Cは高校生による現地取材に基づくレポートである。執筆者は佐多町大字伊座敷の瀬戸山集落出身で、地元在住の祖母から盆行事全般について聞き取りをし、念仏については体験者を訪ねて詞章を聞き取っている。盆行事全体は佐多町内の他集落とそれほど変わるわけではないので、ここでは割愛する。瀬戸山の念仏のおよそについては前掲の米原報告（A）でも触れられているが、この報告の意義は詞章が掲載されていることである。

瀬戸山は南大隅町役場佐多支所（旧佐多町役場）から近い北東の山沿いの集落である。地元でネブツというのは、一団が初盆の家を訪れ、仏壇の前でカネを叩きながらサンを唱える行事である。ユカタを着て、歩いて家をまわるが、途中で墓地があるとそこでミズマツリをした。どの家にも行くわけではなく、初盆の家と頼まれた家に行く。そして唱えるのを途中で止めてはいけない。その決まりを破ると「カゼにあたる」といって悪いことが起きる。ネブツはだいたい夕方からだが、山越えの遠い海岸集落（南および南東方向）に行く場合は、早朝から出発した。瀬戸山以外には市街地の垂水（たるみず）や、竹之浦（南東海岸）など二、三の集落でもネブツを唱える組があつたという。

サンには「ミズノサン」「ナナツゴサン」「クギノサン」「コアギサン」「ホソナゴサン」などがあつた。どのサンでもまずゴゴツ（小言）で始め、トネで終わった。「ミズノサン」は初盆の家で、幼児が死んだ

家では「ナナツゴサン」を唱える。「クギノサン」にはお祓いの意味があるという。「コアギサン」はいずれの場合に唱えるか不明。「ホンナゴサン」の詞章は話者が覚えておらず不明。ひとつのサンが終わるごとにカネを木製小槌で三回叩いた。甲高い音がした。トネは二種類（前半と後半）あったが、後半部分のみが伝承されていた。

#### 四 下野敏見編『佐多町の民俗』より（各地の念仏）

前掲Dは佐多町内各地にて、調査参加者がそれぞれテーマをもって聞き取りをした内容をナマの形で掲載した報告集である。話者はそれぞれ別人で、同じ集落でも話者によって記憶に差があるので内容にくらかの相違点もでてくるが、そのまま掲載されている。聞き取りをする場合、話者が違えば細部に違いがでてくるのは民俗調査ではよくあることである。その差が調整されずに収録されている（注5）ので、ここでもそのまま話者ごとに掲載する。盆行事全体について説明されている場合は念仏に関するのみを抜き出した。念仏について触れられているのは旧伊座敷村の瀬戸山、旧郡村の坂元・川田原・古里、旧馬籠村の島泊・大泊である。

##### 瀬戸山（旧伊座敷村）

①（二九八頁）精霊棚は昭和四〇年頃まで作った。位牌を下におろしてお供えをした。箸はハツノコという萩の枝を削ったもの。ニゾロ（初盆）の家には親戚が集まり、一日か一五日のどちらかで青年たちが念仏を唱えにきた。五・六人が輪になってカネを持ち、念仏を唱えた。

②（三六三～三六四頁）ネブツサンという行事があった。旧七月

一三日から一六日の間毎日、青年（一五歳から四二歳ぐらいまで）二〇～四〇人ぐらいがカネを叩きながらお経を唱えつつ家々を訪れた。初盆の家を優先した。寺には行かない。まず門口でカネを鳴らし、庭をほめる歌を歌う。次に何人かが家の中に入る。位牌は仏壇の下の棚におろし、供物が並べられている。その前で拜んでからクドキを唱える。残りの者は庭で待機。外に立つ人より家にあがる人数が多いが、クドキを唱えることができるのはそのうちの十人ぐらいだったか。お礼として食べ物ももらうが、よその集落に行った場合はオカネをもらうこともあった。道々は別のウタを歌い、途中の墓地や人が死んだ所など亡魂の出やすい場所ではカネを鳴らしモンゴンを唱えてホトケシズメをした。瀬戸山がすんだあと、島泊、尾波瀬、大泊、田尻、外之浦、間泊（まごまり）、竹之浦、浜尻などまで行った。サンの一節に「ガンニスクルク、ビョウドウセイサイ、ナムアマダブツ、ナムアマダブツ」という文句があった。

③（三六三頁）今は坊さんが各家に甲いに来るが、昔は町内一円はまわりきれなかった。そこで村落の有志が三・四人でお経をあげてまわったのだと聞いている。

##### 坂元（旧郡村）

④（四四頁）念仏回りがあった。盆の一三日には早く起きて二〇人ほど集まり、ハシノクチで歌を歌って仏様を呼び出した。それから山越えをして辺塚に行き、二百数十軒の家を回った。辺塚の人たちからぜひ来てくれと頼まれて行っていた。この一年に死んだ人には、その家から頼まれてクギノサンという歌を歌う。米三合ほどの志しをもらう。辺塚から帰ってから、浜尻から坂元まで歌って回る。祭りをする人は歌う人とは別の人がする。米祭り、水祭りというのがある。皿に

ついで水と米を供えておいて、それを竹笹を使って水を振り撒いた。

⑤ (三〇三頁) 坂元の青年達がネブツを唱えて回った。水祭りもした。ネブツの中にはお経の文句もあったが、小さい子供が死んで冥土に行くときのことを表した内容のものもあった。身長くらいの木の棒を持つて歩き、お米などをもらった。この米は祝いの時のようにして炊いて皆で分けた。

#### 川田原(旧郡村)

⑥ (三〇四頁) 七月一四日の晩から一五日にかけて念仏を唱えて回る。針山や浜尻にも行った。オセな人(年かきの人)が南無阿弥陀仏といって鉦を叩きながら七・八人でまわったが、まず一ヶ所で水祭りをして各家庭を回る。米やお金をもらったが、ニジヨロの家では特に多かった。夜中だったので、眠たくならないようにと生姜汁に砂糖を入れて飲んだ。

#### 古里(旧郡村)

⑦ (三六三頁) ネブドンといって、盆に古里内と他集落にて念仏を唱えてまわることがあった。他集落には注文を受けたところのみ出かけていった。念仏の謝礼金をもらうこともあった。

⑧ (三〇一〜三〇二頁) 昭和二二年頃までネブツがあった。一四日夕方から一五日朝まで。青年と老若が混じっておこなうが、青年のうちでも上手な人が選ばれた。練習は盆前一週間ぐらい。夕食のあと公民館に集まり、師匠が教えた。二〇人ぐらいで回るとすると、四・五人が歌い、次の家では別の四・五人が交代で歌う。人数が多い場合は二組に分かれることもあった。ネブドンが来る時は唐竹を一メートルほどに二本切り、表の庭にこれを立て、それぞれに線香を二本ずつ立てる。まず水祭りをする。正座して念仏を唱えたり米を撒いたりす

るが、この時、家の人から紙に包んだオカネと重箱に入れた米をもらう。紙の中は決まっておらず(昭和初期で三円ぐらいが普通)、水祭りをする人がこっそり中身を確認して後ろの人に手モヨで合図する。中身が多ければよい歌が歌われた。四・五人が歌っている間、カボチャの煮付けやニシメなどが出るので、残りの人はそれを食べるなどした。集落内のすべての家をまわり、他集落(竹之浦、外之浦、大泊など)では頼まれた家に行った。手に一五〇センチ程度の竹の棒を持つて突いて歩き、カネも鳴らした。他集落では、カネの音を聞いてから「うちにも来てください」と頼む家もあった。集落内には線香をあげる場所があり、水祭りはそこでもした。ミッノサン(水のサン)は一五分ぐらい、七ツ子サンは二〇分ぐらい。歌ネブツ、コーワツザンなどというのもあった。一五日の朝、自分の集落に戻ると睡眠を取り、夜七時頃に集合して花開きをした。そのあと素麺を食べた。集まったオカネは青年団の経費として使われた。

#### 島泊(旧馬籠村)

⑨ (三〇四〜三〇五頁) 一四日から一五日にかけて、西方や上之園(あげのその)からネブツを唱えながら一団が歩いてきた。一五日の夕方になると、婦人会や青年団が海岸で盆踊りをした。これは昭和の半ば頃まで、する年もあれば、しない年もあった(注6)。

#### 大泊(旧馬籠村)

⑩ (三〇〇頁) 一四日か一五日かはっきりしないが、昭和一〇年から二〇年頃まで、古里からネブドンが新盆の家に来た。青年団を中心にカネを鳴らしてネブツを唱え、そのお礼としてお賽銭を上げた。ネブドンの尻をつまめばネブツができないといつて子供達がつまんだものだった。

瀬戸山（旧伊座敷村）・坂元・川田原・古里（以上旧郡村）・島泊・大泊（以上旧馬籠村）の六地区にて、十人からネンブツのことが聞き取られている。ネンブツをしていた集落と、他集落からまわってきたところとを区別することができる。前四集落がネンブツを実修し、後二集落がネンブツ一行がまわってきたところである。②は瀬戸山の一団は、島泊・尾波瀬・大泊・田尻・外之浦（以上旧馬籠村）・間泊・竹之浦・浜尻（以上旧郡村）までまわっていったとしている。瀬戸山からは田尻（佐多岬の入口）までがもつとも遠く、直線距離で十キロほどもあり、今のように道路未整備の戦前は、一人一人が通る曲折した山越えの道があるのみで、歩く距離は二倍にもなったのではないか。

④は坂元のネンブツ組は辺塚まで行ったとする。坂元からいったん浜尻方向に進み、その手前から海岸沿いに山越えをして辺塚に達したようである。この場合も坂元辺塚間は直線距離で十キロほどあり、実際の道はさらに厳しかった。⑧は古里の一団が竹之浦・外之浦・大泊まで行ったとする。⑨（島泊）では西方と上之園から念仏が来たとする。このように旧佐多郷全域にてネンブツ行事がおこなわれていたことが、こうした聞き取りから確認することができる。

## 五 岩下のネンブツの詞章

昭和六〇年、前述したように旧郡村の岩下の体験者が詞章をメモした手帳を見る機会があった。十曲のサンと「仏もどし」の唱句、その他の唱句（呪文）が記されている。以下に収載する。すべてカタカナで書かれているが、それではきわめて読みにくいので、サンについて

は漢字に宛てても間違いないと判断される部分は漢字表記とした。

### 1 釘のサン

キミヨウチヨウライ釘のサン  
 これよりばんとてしもとくに  
 にこやばんとて寺ござる  
 そのまたお寺や上人が  
 御弟子たちは皆寄りて  
 ひそかに頓死をめされける  
 一日一夜はかびようめす  
 二日（にじつ）てのやにあたる日は  
 野辺や送りを押しとどめ  
 三日三夜にあたる日は  
 そのまた上人よみがえる  
 御弟子たちはな皆おるか  
 罪人どもから誘われて  
 地獄めぐりをしてきたよ  
 地獄の数をも見てきたよ  
 地獄のかずをもあまたある  
 二百三千むつござる  
 餓鬼道しこら道閻魔道  
 くうや地獄にか\*地獄（\*は判読できない文字）  
 釘の地獄がくな地獄  
 釘のつもりも見てきたよ  
 一尺六寸大（おお）な釘

九寸二分が中な釘  
五寸二分が下(さが)り釘  
弥陀と薬師の立ち寄りて  
釘をも縮ゆめる下知をめす  
一尺六寸大な釘  
九寸二分に縮ゆめある  
九寸二分が中な釘  
五寸二分に縮ゆめある  
五寸二分が下り釘  
三寸二分に縮ゆめある  
うちどうちどが極まりて  
頭(こうべ)に七本釘を打つめ  
首と腕(かいな)に十四本  
胸と腹とに十四本  
腰と足とに十四本  
四十や九本は皆打つが  
神はお経の雲の上  
下(しも)は奈落の底までも  
しちりしちりの音がする  
あとに末々あるのは  
お寺に案内申しよせば  
頭の七本釘ぬぐる  
お寺に使いに参りては  
首と腕の釘ぬぐる  
お寺にお経が始まれば

胸と腹との釘ぬぐる  
四十や九日のあたる日は  
念仏修行を頼みいれ  
釘の念仏唱ゆれば  
腰と足との釘ぬぐる  
四十や九本は皆ぬぐる  
あとに末々な人は  
打ちたる釘をも打ち流す  
シヨクシンジヨーブツナムアマミダ

## 2 菩提サン

キミヨウチヨウライ菩提サン  
上り下りてふづ坂を  
その坂越ゆれば奥の院  
奥の院とて寺ござる  
そのまたお寺に参りては  
親の菩提を問う寺で  
親の菩提を問わぬ人  
湧川(ゆがわ)を掘ればな水出(いで)ぬ  
植木を召せばな梢(こずえ)ない  
はちそうはなせば花開く  
踏んだる足のな小草まで  
萩もススキも皆枯るる  
そのまたお寺に参りては  
親の菩提を問う寺で



親の菩提を問う人は

湧川を掘ればな水出る

植木を召せばな花開く

踏んだる足のな小草まで

萩もススキも皆なびく

枝も栄える葉も繁る

七本蓮華も花開く

開きし蓮華も重ね着て

つほみし蓮華を手を受けて

蓮華のちくを杖につき

さんが小川さきよの橋

さきよの橋を渡るには

弥陀と薬師のおはきたち

地藏菩薩のお手引きて

餓鬼道地獄をよそに見て

極楽浄土に渡りやる

シヨクシンジヨーブツナムアマミダ

### 3 七つ子サン

キミヨウチヨウライ七つ子は

父の生まれをたずぬれば

父の生まれは三河なり

母の生まれをたずぬれば

母の生まれは吉野なり

われは九州肥後の国

三国（みくに）あわせの者なれば

父に離れて三年忌

母に離れて今日七日

七日にやなれども人問わぬ

一畳たたみに臥しころび

半畳ばかりはわが身なり

半畳ばかりは涙なり

そこで七つ子たまがりて

父よ母よと嘆けども

答えしものとしてさらになし

答えしものとして岩ひびき

御尚（おんしょう）様のな聞きつけて

何と嘆くか七つ子は

わしが哀れを語りましょ

父に離れて三年忌

母に離れて今日七日

七日にやなれども人問わぬ

わしはこの世の一人者

何としましょか御尚様

御尚様のな御意なれば

ものなたとえがあるぞ聞け

岩間育ちの姫小松や

親はなけれど子は育ちゆく

苔をもたよりに育ちゆく

わしはこの世の一人者

なんとしましよか御尚様  
御尚様のな御意なれば

まだもたとえがあるぞ聞け  
隅田川原の糸柳

親はなけれど育ちゆく  
砂をもたよりに育ちゆく

わしはこの世の一人者  
何としましよか御尚様

御尚様のな御意なれば  
まだもたとえがあるぞ聞け

菖蒲ヶ池の浮かび草  
親はなけれど育ちゆく

水をもたよりに育ちゆく  
わしはこの世の一人者

何としましよか御尚様  
御尚様のな御意なれば

それならままよとふりすてて  
父のゆずりのしらみ太刀

恋しき時はな差してみる  
悲しき時はな抜いてみる

抜いてはみれども父見えぬ  
母のゆずりの玉手箱

恋しき時はな抱いてみる  
悲しき時はな開けてみる

開けてはみれども母見えぬ

それならままよとふりすてて  
父のゆずりのしらみ太刀

これも菩提の寺にあげ  
母のゆずりの玉手箱

これも菩提の寺にあげ  
長崎かもじが十二まげ

これも菩提の寺にあげ  
唐(から)の鏡が七おもて

これも菩提の寺にあげ  
帯の結びが十二すじ

金欄緞子(きんらんどんす)はかぎりなし  
これも菩提の寺にあげ

親の菩提に問うたとて  
天竺方(がた)をも先立ちて

天竺方をな上(のぼ)りやる  
天竺方をも修行して

親の菩提とまわりやる  
三年三月にまわりきて

親のみ墓を見たまえは  
山が山ほど荒れている

わしも兄弟あるならば  
親のみ墓は荒らすまい

すぐやわが家に帰りやる  
み墓参りを召す時は

左の腕(かいな)にヤクワとカマ

右の腕にや香（こう）と花  
み墓お前に参りては

おとどし草はなカマで刈る  
去年の草はなクワで打つ  
今年の草はな手でむしる

取りたる草をなゴザとして  
花をあげてな香をたく  
拝みをあげてな涙なり

み墓枕で通夜を召す  
二人の親たちかけをめす

夜半時分になりぬれば

二人の親たち立ち寄りて

早く帰れよ七つ子は

ここは冥土の境じゃど

シヨクシンジョーブツナミアミダ

#### 4 花じよサン

キミヨウチヨウライ花じよサン

天女と申すは女人なり

女人のその中御子（おんこ）様

御子が一人おわします

無情なる風から誘われて

あまりわが子のくやしさに

ゴザをうちはえ枕寄せ

寝てやまてどもわが子来ぬ

夢にや見れおも目にや見えぬ  
それでもわが子のくやしさに

花じよお寺に参りやる  
花じよお寺の花見れば

花の数をもあまたある

わが子に似たりし花はなし  
そこくの花をも見たまえば  
開きし花から散らずして

つぼみし花から散りていく

すなわちわが子もあのとおり

すぐやわが家に帰りやる

菩提のお寺に参りては

御尚様をもたのみいれ

あとにとむらいなされける

その時わが子の成仏を

問うべき親から問わずして

親から問われて南無阿弥陀

#### 5 お茶んサン

キミヨウチヨウライお茶んサン

仏のみ前を見たまえば

みつの花びんに花をあげ

さても見事やや見事

仏のお前をも見たまえば

みつの茶碗にお茶をあげ

お茶の煙の尊さや

さても見事やや見事

仏のお前を見たまえば

みつの香炉に香をたく

香の煙の尊さよ

さても見事やや見事

しよえんのお庭を見たまえば

梅の古木(こぼく)に花ひとつ

風のあらしで散りていく

さても見事やや見事

シヨクシンジョーブツナムアマミダ

## 6 水のサン

キミヨウチヨウライ水のサン

登り登りて死出が山

死出がお山と申しよせば

いかなる人がな踏みそめて

先を見れども連れ行かん

後(あと)を見れども連れもこん

死出がお山を一人行く

一人行く身の悲しさよ

ふたたび帰らぬ道なれば

娑婆と冥土のそのあい

黒金(くろがね) 御門が七重(ななえ) 立つ

七重の御門に戸がたちて

その戸が強くて開きもせぬ

春の彼岸にウラの盆

秋の彼岸も十七日

三七二十の一日は

金(かね)の鍵でも開かぬ戸が

みだの六字で開きたもう

そのとき亡者も娑婆に来る

娑婆に来れども目に見えぬ

なんとちぎりし親と子は

または二人のそのあいに

障子を一重(ひとえ)に隔つれば

現在言葉もかわしやせぬ

後(あと)に末々ある人は

三尺みぶんに棚をつけ

棚の上でなひよじある

よろずな水ノコきりまぜて

鴨川水をも汲みあげて

棚の上でな水祭り

後(あと)に末々ない人は

棚のぐるりのざぜのめす

棚よりこぼれしすたれ水

すたれし水をも受け取りて

ほうかいしようろと祭られる

後に末々ある人は

松や灯明もとぼさるる

極楽浄土も明らかに

弥陀のお前も明らかに

後に末々ない人は

松や灯明もともされぬ

極楽浄土も暗くして

弥陀のお前も暗くして

すなわち無明の闇に入る

シヨクシンジヨーブツナムミアミダ

### 7 ごやんサン

キミヨウチヨウライごやんサン

暁ごやを西見れば

雲は東にあざやかに

阿弥陀如来の船を出す

潮のたなびくそのおまに

弥陀と薬師の船を出す

ざかやばていがおもてめす

地藏菩薩が舵をめす

観音経を帆にもちて

せいし観音みなとめす

宝島に行くときは

あらさこらさで上(のぼ)りやる

宝島に乗りこんで

花ふる浄土につみかえる

シヨクシンジヨーブツナムミアミダ

### 8 あたまちサン

キミヨウチヨウライあたまちは

屋敷のけいど見たまえば

南高(たこ)して北下(さが)り

やじひく人数を雇いいれ

上のやくまを引き払い

さても見事や見事

中に宝を引きこめて

一丈二尺にたたみあぐ

春の彼岸に山はじめ

秋の彼岸に雇いぞろえ

大工殿こそ雇いいれ

大工殿こそ受け取りて

打ち出の小槌を腰に差す

すみとかねとを手に持ちて

一丈二尺の間(けん)さおで

四十や二間の間積り(けんづもり)

間目(けんめ)間目にシラカネを

四方四面に縄を張る

一丈二尺のぞうつきで

地をも固めてまわりやる

あおいの石をも並べすえ

桃の柱をおし立てて

シラカネけたばるおし上げて

合掌結びがぢぞ結び

ふづのふねのくおし上げて  
祝儀結びが縁結び  
あおりの垂木を架け渡し  
あおりのしもとを押しあてて  
コガネの七つをゆてまわる  
ようじなはじをもまきおろし  
さても見事やや見事  
屋根ふく人数を雇いいれ  
縄をもつけたるうんばたち  
かやとかやよとおこいやる  
下からやるかや千ばなり  
上からやるかや千ばなり  
千ばのかやをも打ち広げ  
すもとすもとおこいやる  
あおりのすもとを押しあてて  
はいよはいよとおこいやる  
はいさす人数が受け取りて  
中に宝をひきとめて  
うちの悪魔をさし払い  
四十や三ほこに棟あわせ  
こたかこむねにおん瓦  
さても見事やや見事  
前の平間(ひらま)のほめかたは  
亀のくないとほめてやる  
後ろの平間のほめかたは

鶴のはざいとほめてやる  
両方のつまのほめかたは  
鳩やかたかとほめてやる  
さても見事やや見事  
頭(かしら)のひと間を見たまえば  
十二や三の稚児たちが  
コガネのしよくをも押し立てて  
あおりな墨をもすり流す  
我も我もと手習いを  
さても見事やや見事  
中のひと間を見たまえば  
鶴と亀との作り酒  
その酒とらぬ人はない  
末(すえ)のひと間を見たまえば  
十七八の下女の衆が  
玉のたすきで働きやる  
さても見事やや見事  
北のけいばを見たまえば  
四十や二間のみ馬屋を  
四十や二匹の駒たてて  
頭(かしら)をそろえてやや見事  
しよえんのお庭を見たまえば  
つつじ椿の花てらす  
しよえんのお庭を見たまえば  
梅のほほこに花ひとつ

風のあらしにすたれいく  
あたまちサンとはこれを説く  
シヨクシンジョーブツナムアマダ

9 こはぎサン

キミヨウチヨウライこはぎサン  
父の生まれをたずぬれば  
父の生まれは伊予の国  
母の生まれをたずぬれば  
母のうまれは土佐の国  
さても夫婦のその中に  
こはぎと申すな姫がおる  
よねみつ長者におわします  
よねみつ長者の下女となる  
よねみつ長者のことなれば  
四十や四人の下女使い  
四十や四人のその中に  
こはぎが一人(いちにん) 身がほそる  
体がやせてな身がほそる  
四十や三の下女の衆が  
よねみつ長者におわします  
こはぎは日々(にちにち) 身がほそる  
体がやせてな身がほそる  
よねみつ長者がご覧じて  
こはぎをひさもち呼び寄せて

こはぎが日々身がほそる  
体がやせてな身がほそる  
こふくつもりがきびしいか  
はんまいつもりが少ないか  
はんまいつもりもゆつらかに  
こふくつもりもゆつらかに  
親の年忌がまわりきて  
父の年忌が七年忌  
母の年忌が三年忌  
菩提を問う人なきゆえに  
一合五酌の飯米(はんまい)を  
五酌はその日のふくにあげ  
五酌はその日の修行に出す  
五酌は自分の飯米に  
それゆえこはぎは身がほそる  
よねみつ長者のことなれば  
それならこはぎはいとまない  
三十さがりてだいきする  
四十や三の下女の衆に  
じゆぎようもしてこそいとまない  
すぐやわが家に帰りやる  
あばらやつこがくえはてて  
こうぶがえをもかけておる  
何を買およも銭がない  
ちすじにのべたる髪の毛を

三つやかもじにこしらえて  
かもじを売ろよとまわりやる  
三百文にも買(こ)うてたもれ  
かもじを買う人さらにな  
二百文にも買うてたもれ  
かもじを買う人さらにな  
百文銭でも買うてたもれ  
かもじを買う人さらにな  
天竺市にもちのほせ  
かもじを売ろよとまわりやる  
かもじを買う人さらにな  
三百文にも買うてたもれ  
かもじを買う人さらにな  
二百文にも買うてたもれ  
かもじを買う人さらにな  
百文銭にも買うてたもれ  
かもじを買う人さらにな  
弥陀の薬師の立ち寄りて  
かもじの値づもりめされける  
三文銭にも売り払え  
一文銭では灯明買え  
一文銭では油買え  
一文銭ではじゆみとさら  
花村山にもちのほせ  
親の菩提ともしやる

雨の降る夜(よ)も降らぬ夜も  
風の立つ夜も立たぬ夜も  
いかなる夜も消えはせぬ  
七日七夜はとほします  
よねみつ長者がそれを見て  
四十や三の下女の衆に  
花村山のとほし火は  
いかなる長者がとほし火か  
四十や三の下女の衆が  
よねみつ長者におわします  
花村山のとほし火は  
こはぎが菩提のとほし火じゃ  
こはぎは自分の下女の子と  
下女に負けてはいかにせん  
四十や三の下女の衆が  
千の灯明買いいれて  
千の皿をも買いいれて  
千ばい油を買い入れて  
四十や三の下女の衆が  
花村山にもちのほせ  
千の灯明架け渡し  
千の皿をもすえ並べ  
千ばい油をつぎわたし  
親の菩提ともしやる  
よねみつ長者のともし火は



油かぎりに消えまする  
寿命をもちかぎりに消えまする  
よねみつ長者が腹立ちて  
こはぎが菩提にとほし火を  
竿竹取りては打ち落とす  
かわげ皿のことなれば  
かげもかげたか三つにかげ  
三つにはかけても火は消えぬ  
そろう菩薩という山伏が  
この火は大事におわします  
おさめ所におさめやる  
ひとつは唐（から）のきんなん寺  
きんなん寺にもおさめやる  
ひとつは坊のないちじゅ院  
いちじゅ院にもおさめやる  
残りしひとつは石のかど  
石のかどにもおさめやる  
しよけんしよぎよのぶぐのため  
すぐやこはぎは地蔵となる  
諸人万人参りやる  
よねみつ長者は火の車  
八方地獄に落とさるる  
シヨクシンジョーブツナミアミダ

10 ほそなごサン

キミヨウチヨウライほそなごは  
のぼりのぼりて箱根山  
箱根お山の中の峠  
ほととぎすとないう鳥は  
聞けば冥土の鳥と聞く  
まこと冥土の鳥なれば  
わが子の行く末語り聞く  
われは若鳥知らねども  
あらあら語りて聞かするよ  
十よりうちのなほそな子は  
サイの河原で砂遊び  
小石を寄せてな塚をつく  
砂を寄せてな塔をつく  
一重くんでは父のため  
二重くんでは母のため  
三重くんではわが身ない  
四重山すがたくみあげて  
上よりおがめば塚ひとつ  
下よりおがめば塚ふたつ  
ひとつの塚はなほととぎす  
二つの塚はな弥陀薬師  
そこではそなごよろこんで  
昼は日日花香とり  
日もと下れば香をたく

おんよりざんしな者はなし  
クロガネ延べたるさるのほうで  
ついたる塚をもつきくやし  
くんだる塔をもこねはなす  
そこでほそなごたまがりて  
父よ母よと嘆けども  
答えし者としてさらになし  
答えし者として岩ひびき  
地藏菩薩の聞きつけて  
なんと嘆くかほそなごは  
父よ母よと嘆けども  
答えし者としてさらになし  
答えし者として岩ひびき  
わしが父母まだ娑婆に  
冥土の父母おれらじゃと  
そこでほそなごよろこんで  
ようじなようなるひざをおる  
かいじなようなる手を合わせ  
助けてたもれよ地藏菩薩  
地藏や菩薩のお手引きで  
地藏しようどに引きつけて  
地藏お前で花遊び  
枯れたる花では遊ばれぬ  
あとに親たちあるならば  
色よき花をもたむけやれ

清きし水をもたむけやれ  
シヨクシンジョーブツナムアマミダ

### 11 仏もどし

帰命の一年春来れば  
神はおうきよの雲の上  
下(しも)は奈落の底までも  
ことをつもりしことごとし  
五つの不思議ととく中を  
南無と一遍唱ゆれば  
地獄じょうとの苦を逃(のが)る  
南無と二遍唱ゆれば  
餓鬼道地獄の苦を逃る  
南無と三遍唱ゆれば  
修羅道地獄の苦を逃る  
南無と四遍も唱ゆれば  
畜生浄土の苦を逃る  
南無と五遍も唱ゆれば  
人間浄土がじょうずして  
南無と六遍唱ゆれば  
六道にてんの苦を逃る  
南無と七遍唱ゆれば  
七てん地獄の苦を逃る  
さてはどつかのごろくども  
または山野(さんや)のけだものが

草木（そうもく）にいたるまで  
今唱ゆる念仏を受け取りて  
成仏すること疑いなし

グワンノエー シユクロクビヨウドウ  
セイサイ ドウホツボダイセン  
オウジヨウ アンダランコ

## 12 その他の唱句

### (1) カネ打ち出し

オウナムテンドウナムサンゲ  
今サンゲトワ  
チウドウツカウルコントウワ  
ウガイスルコレ水マサリホツクシヨリ  
ジョジョノキヨクヒジリノケサノムツムツ  
カヒマシマス 一重ニミスンデ  
カタニアグレバ  
スナハチボンノボダイノ  
ミノアカオススゲ  
マツタク クチニアゲ  
クチニコアレバ  
ロツコンノ ムシノザイシヨ  
タダ今マサニ キヨメテコーリメス  
オウシヨギヨウムゾウ ザソウメツポウ  
シヨメツメツ ザクメツ

テンヂクノテンジヨウニ  
マイルタマノシヤクジツ  
ザソウメツポウトワ  
ゴクラクノフカイヲワタル  
ミノヒノフネ

ザクメツヒオクイ  
コンニチノホーウガンノ  
ユウームンナイコノユウモンオトナエテワ  
ナムダイハンヤノトメクルマニモマノルコ  
トナイ ムツドウセ  
カイトウ

ムルノシン ムルノ光明今打鳴ラス  
カネノヒビキニミサレテ  
アオリノネジオキクゾウレシキク

### (2) 十三仏

ブツ  
シヤカ  
モンジャ  
フゲン  
ヂゾウ  
ミロク  
ヤクシ  
クワンノン  
セイシ

アミダ

アシク

ダイニチ

ダイニチコクゾウ

(3)米祭り

オーコノゴコクト申スワ

テンヂクニテワ

十四ノボサツト ウケトイタマエ

トウドウニテワ

クギノボサツト ウケトイタマエ

ニホンワガヂユウニテワ

ロクジノボサツト ウケトイタマエ

アト七代先七代

二五代ノ先祖タチマデモ

ウエンムエンノシヨロタチマデモ

コノサンゾウボサツオモツテマツイ申ス

マツリハズシワゴザルトモ

ウケトイハズシワナク

シツケイニタテマツル

(4)水祭り

オーコノ水ト申スワ

天ヂクニテワ位方カモ川ノ水ト申ス

(オーコノ以下七回)

ナムキャビロ シヤノマガマダラニ

ジンヅガハラハレタヤソワカ

オンバラザンバラ

ヒダリヤ ビスドニ

オンドリサリソツカ

(オンバラ以下七回)

(5)カネ打ち切り

オー山奥デ鹿ヲ取り

毛オ抜き 筆ヲイレ

ミダノ六字オ書クバカラ

オーナムメーゴサンガイ

ジヨウコクジツポウワ

クウホーナイ モトウザイガ

シヨグンナンモク マヨウガイエニ

サンガイエ ミヤコ出ヅル

サトイオモツテ ジポウワクウホウナイ

イズレガトコロニ

ナイモギタラン 七ナンソクメツ

右ニンキヨウハ ウヤマツテ申ス

(右ニンキヨウハ以下七回)

六 瀬戸山のネンブツの詞章

前掲Cに掲載の詞章を掲げる。最初に「コゴツ」というのがあるが、

これはサンを始める前に唱える言葉。前掲Aではこれによって仏を呼び出すとする。「ゴごと(小言)」の変化だろうか。前掲Aには「ゴコツと言う」とあり、前半の一部が収録されているが、内容は同じである。その次に「ミズノサン」「ナナツゴサン」「クギノサン」「コアギサン」の四つがある。最後の「トネ」は前半部分を聞き取ることができなかったという。後半部分が「その二」として収録されている。全体はカタカナ表記だが、以下は間違いないと思われる漢字を宛てて示す。

### 1 ココツ

ナムテンド ナムサンゲー  
 サンゲートーワ イマツゾー  
 ツカオボコントー  
 ウガイオスルコトアリ ソーリソーゾー  
 仏法をヒジリ  
 フゾーノ カケタルサノケサオ  
 ヒトエニム結んで肩に掛カクレバ  
 ボンノ菩提ノミノハカヲ  
 スソクルクミアゲ クチニクワウレバ  
 スナハチ 六根清浄  
 ムシノザイソー 清め奉る  
 カラキノスズヲ 手ニ受けて  
 テンニザラザラ モミアグレバ  
 テンハヒラクル  
 チニザラザラ モミサグレバ  
 チハクダル

ムソーレホーシントー  
 カヂヤク ハチボンノトガンシジヨ  
 ナンダラメー ノムカソーホー  
 マカサツカキ ソーチスアカ、  
 サクダイメージン メヨーホッキゲンゼン  
 ザイブメヨ  
 アンダーロツセマツダイ  
 メヨーククンゲン サンデーリヤクワ  
 ブーイッデー  
 アンダーオヒトエニネンズレバ  
 アンダノユクニモ浄土アリ、  
 フゾー釈迦如来 普賢モンジ  
 弥勒薬師 クワンゲン セイシハクシ  
 ダイニツコク ブーホンマデ  
 ワタサル トモナンパー  
 南無サマヤ 南無シオヤ  
 南無トートゲツヤ ブレウキテ  
 サナムラキ ヒダリヤミギヤ  
 ビツラニホントロー サーレスアカ  
 南無一心テウライ マントクエンマン  
 サーカーニヨライ  
 サーレーホンジ ボツノホーカラ  
 ツーバーガツライ  
 テウシージーイガカンヨ  
 ユーガゲンヨウヤクスーズー

カズホンダイ ボンダイリーコー

ニンブツ ニンビキ

ソーホーサツギヨ ブーミヨーヒンザ

コーミヨードー ダイニチ

コンソーチョーライ

オーカネ打ち鳴らす念仏ワ

フゾーオトイテ カタワニカケ、

キンコクノカネ ソーコクニ打ち鳴らす

アオンノ響きをヒニソメテ

アオンノ響きをキクトタツシ

## 2 水のサン

帰命頂礼ミズノサン

ノボイノボイの死出が山

死出が山を一人行く

後(あと) 見ても連れはなし

先(さき) 見ても連れはなし

死出が山をと申せしが

いかなる人を踏みそめて

二度と帰らぬ道なれば

娑婆(さば)と冥土のそのあい

クロガネ御紋が七重立つ

七重の御紋に戸が立ちて

その戸がつよにも立ちもへぬ

その戸がつよにもあきもせぬ

春と彼岸もひと七日

うらの盆きてもひと七日

秋の彼岸もひと七日

三七二十一の一日は

カネの鍵でも開かぬ戸が

みたと薬師が立ち寄れば

六字ノ経文なざるれば

その時その戸が開きやる

その時モージヤも娑婆(さば)に来る

何と契りし親と子は

障子一重を隔つれば

現在言葉も交わされぬ

七月あーなー七日ハ

三尺二分の棚を付け

棚の下での水祭り

棚の上での座禅めす

よろずのミズノコ切り合わせ

谷川水をも祭りやる

鴨川水をも祭りやる

湯川の水をも祭りやる

色良き花をも祭りやる

後に末々ならぬ人

棚の下での座禅めす

棚の下での水祭り

ひたれしシ水を受け取りて

ひたれし花をも受け取りて  
北海シジヨ一モ祭りある  
後（あと）に末々ある人は  
松のツメをもともしやる  
今生後生も明らかに  
極楽世界も暗くして  
即ち無明は闇という  
ソークシンジヨブツ ナムアミダ

### 3 七つ子サン

キミヨウチヨウライセツ子よヨ  
父の生まれをたずぬれば  
父の生まれはイカガナシ  
母の生まれをたずぬれば  
母の生まれは吉野なり  
我は九州肥後の国  
三国あわせんものなれば  
父に離れて三年忌  
母に離れて今日七日  
七日になれども人と会わぬ  
あまり我が身のくやしさに  
一畳畳にほしころぶ  
半畳ばかりは我が身なり  
半畳ばかりは涙なり  
御尚（おんじょう）様が聞きつけて

何と嘆くか七つ子よ  
父よ母よと嘆きもす  
物にたとえがあると聞け  
ゆう間に育つ姫小松  
親はなけれど子は育つ  
御尚様の御意なれば  
苔をも頼りに育ちゆく  
まどもたとえがあると聞け  
墨田河原の青柳  
親はなけれど子は育つ  
御尚様の御意なれば  
砂をも頼りに育ちゆく  
まどもたとえがあると聞け  
べードが池の浮かべ草  
親はなけれど子は育つ  
御尚様の御意なれば  
水をも頼りに育ちゆく  
我はこの世の一人者  
この様な哀れなことはなし  
我はままよと振り捨てて  
父の譲りのシラミ太刀  
いたわし時にはそえかかる  
くやしき時には抜いでみみ  
抜いでみれども父見えぬ  
母の譲りの空手箱（からてばこ）

いたわし時にはそえかかる  
くやしき時には開けてみる  
開けてみれども母見えず  
空の鏡が七表（ななおもて）  
長崎カモジか十二鬻（まげ）  
帯の結びが十二筋  
金襴緞子は限りなし  
これおも菩提にたてまつる  
親の菩提にくぬめぐる  
天竺がたまで巡りやる  
三年三月巡りもて  
親のみ墓を見給えば  
山が山程荒れ果てだ  
我も兄弟あるなれば  
親のみ墓は荒らします  
お墓参りをめす時は  
左の御手（おんて）にやコート  
右の御手にや鋏と鎌  
おと年草は鋏で打つ  
去年の草は鎌で刈る  
今年の草は手でむしる  
刈りたる草をゴザにして  
み墓枕で通夜をめす  
夜半（よはん）時分になりぬれば  
親の二人が立ち寄りて

ここは亡者の境なり  
早く立ち退け七つ子よ  
ソークシンジヨブ ナムアミダ

#### 4 釘のサン

キミヨウチヨウライ釘のサン  
これよりばんバン トーシモトーゲン  
日光山とて寺ござる  
その御寺のりようチクシヨ  
にわかには頓死をなされしが  
御尚（おんしょう）たちも皆寄りて  
悲しみやるこそ限りなし  
罪人たちも皆寄りて  
悲しみやるこそ限りなし  
おん弟子たちも皆寄りて  
悲しみやるこそ限りなし  
一夜も二夜もとりおかん  
それでも御身はあたたかに  
五夜も五日もとりおん  
それでも御身はあたたかに  
七日七夜その内に  
えんもーたちが立ち寄りて  
えんもーたちのお手引きで  
地獄巡りをなされしが  
地獄巡りをなされきて



御尚静かな物語り

おんでんたちもそれをきて

喜びやるこそ限りなし

罪人たちもそれをきて

喜びやるこそ限りなし

御尚たちも立ち寄りて

喜びやるこそ限りなし

えんもーたちも立ち寄りて

地獄のいささか語り聞け

地獄の数をもあまたある

一百三千むつ地獄

一の哀れは釘地獄

くーな地獄はむつ地獄

風の地獄も釘地獄

東方薬師が立ち寄りて

釘の評判なされしが

一尺二寸の釘もある

八寸二分の釘もある

六寸二分の釘もある

四寸二分の釘もある

その身その身の咎(とが)による

みなと薬師が立ち寄りて

釘のちぎりをなされしが

一尺二寸の釘はまた

八寸二分にちぎりやる

八寸二分の釘はまた

六寸二分にちぎりやる

六寸二分の釘はまた

四寸二分にちぎりやる

その身その身の咎により

えんもーたちが立ち寄りて

くろがね扉にかちのせる

ヒヂリヒヂリとお打ちやる

しも打つ釘の音はまた

七くの底までこたえたる

かみ打つ釘の音はまた

雲の上まで聞こえたる

頭(こうべ)に三つの釘を打つ

両が眼(まなこ)に二つの釘を打つ

口に一つの釘を打つ

左の腕(かいな)に五つ打つ

右の腕に五つ打つ

胸に六つの釘を打つ

背中に八つの釘を打つ

腹に七つの釘を打つ

腰に二つの釘を打つ

左の足に五つ打つ

右の足に五つ打つ

四十や九本の釘を打つ

後(あと)に末々ある人は

三日びをもといければ  
頭の三つの釘抜くる  
七日びをもといければ  
両が眼の釘抜くる  
三十日をもといければ  
口の一つの釘抜くる  
四十や九日もといければ  
左の腕の釘抜くる  
百か日をもといければ  
右の腕の釘抜くる  
一すぎ日をも申えは  
胸の六つの釘抜くる  
三年忌をも申えは  
背中の中の八つの釘抜くる  
七年忌をも申えは  
腹の七つの釘抜くる  
なや三年申えは  
腰の二つの釘抜くる  
二十や五年申えは  
左の足の釘抜くる  
三十や三年も申えは  
右の足の釘抜くる  
四十や九本の釘ぬくる  
後に末々ある人は  
打ちたる釘をも打ち流す

差したる釘をも差し流す  
東方薬師が立ち寄りて  
六字の経文なさるれば  
その時その釘皆抜くる  
ソークシンシンジヨウブツ ナムアミダ

##### 5 ことあぎサン

キミヨウチヨウライことあぎサン  
ことあぎと申せし姫はまた  
父の生まれをたずぬれば  
父の生まれは佐渡(さと)の国  
母の生まれをたずぬれば  
母の生まれは伊予の国  
我は越後の生まれなり  
三国(みくに)合わせの者なれば  
父に離れて七年忌  
母に離れて三年忌  
ことあぎと申せし姫はまた  
姿を見れば春の花  
形を見れば秋の月  
こねみつ長者とおはします  
ことあぎと申せし姫はまた  
よねみつ長者の下女なり  
百人下女も使いしが  
百人下女の中に

こあぎが一人痩せ細る  
飯米（はんまい）積りが少ないか  
奉公のしぶいが厳しいか  
そらほどみえどもあるかよと  
奉公のしぶいも厳しゆない  
飯米積りもそうたれど  
親の菩提が巡り来て  
親の菩提になるかよと  
一日一合の飯米は  
五勺はその日の修行による  
五勺は我が身のためのうち  
それで我が身が痩せ細る  
よねみつ長者はそれをきて  
こあぎを前にお呼びやる  
こあぎご申せし姫はまた  
一日暇（いとま）がほしけれど  
一代暇くれあい  
それでこあぎは喜んで  
三でうさがいてだはいはいて  
かいじのようなる膝を折り  
ようしのようなる手を合わせ  
よねみつ長者を伏し拜む  
それでこあぎはさがりある  
百人下女の朋輩衆が  
さらばさらばの暇乞い

それでこあぎはさがりある  
我が家に帰りて見給えば  
親の菩提が巡り来て  
親の菩提になるかよと  
菩提をとるよがござらねど  
左の鬢（びん）の毛摘み取りて  
右の鬢の毛摘み取りて  
カラのカモジを作りやる  
カモジを売ろよと巡れども  
カモジを買およ十人もなし  
その日も我が家に持ち帰る  
二日の一日持ちいだす  
カモジを売ろよと巡れども  
カモジを買およ十人もなし  
その日も我が家に持ち帰る  
三日の一日持ちいだす  
またその日の翌日に  
天竺がたまで持ちのぼせ  
カモジを売ろよと巡れども  
カモジを買およ十人もなし  
天竺がたから持ちくださる  
カモジを売ろよと巡れども  
カモジを買およ十人もなし  
みなと薬師が立ち寄りて  
こあぎはカモジの値積もりで

三文ばかりにぬ値積もりで  
三文ばかりに売れといふ  
こあぎと申せし姫はまた  
三文文にも売りたさや  
二メ文にも売りたさや  
一メ文にも売りたさや  
みなと薬師の御意なれば  
三文ばかりにぬ値積もりで  
三文ばかりにお売りやる  
一文銭では灯籠(ツロ)を買う  
一文銭では皿を買い  
一文銭ではジュミを買い  
油を買およも銭がない  
キンブ笠にて持ちこやし  
武蔵が原(はる)にて持ちのほせ  
親の菩提に火をともし  
油はつがねど火はともり  
雨に降る夜(よ)も降らぬ夜も  
風の吹く夜も吹かぬ夜も  
七日七夜は消えはせぬ  
よねみつ長者はそれを見て  
武蔵が原のとほし火は  
如何なる人のともし火か  
風の立つ夜も立たぬ夜も  
雨の降る夜も降らぬ夜も

七日七夜は消えはせん  
百人下女の者どもが  
武蔵が原のともし火は  
如何なる人のともし火か  
こあぎのぶだいのともし火と  
よねみつ長者はそれを聞いて  
一代下女につけたむね  
あれに負けてはいかがかと  
コガネのみさおを三本と  
灯籠(ツロ)を千ツロ買い揃え  
皿を千皿買い揃え  
ジュミを千本買い揃え  
油を千ばい買い揃え  
キンブ笠にて持ちこやし  
武蔵が原にて持ちのほせ  
コガネのみさおを立て揃え  
ツロを千ツロ掛け揃え  
皿を千皿据え揃え  
ジュミを千本立て揃え  
油を千パイつぎ揃え  
後(あと)からつくれば先消える  
先からつくれば後消える  
油限りにジミ限り  
よねみつ長者は腹立ちて  
コガネのみさおをこしらえて

こあぎの菩提のとしびを  
コガネのみさおで打ち落とす  
打ちにて落とせば火はともる  
そのおん皿は三つに割れ

三つに割れても火はともる  
一つのかげはなそれはまた

高野山にて納めやる

一つのかげはなそれはまた

霧島さんにて納めやる

一つのかげはなそれはまた

石の中にて納めやる

世間しじょうのためのうち

ソークシンジヨブツ ナムアマダ

## 6 トネ(その二)(その一は記載なし)

オオオク山デシシカオトイ

ケオヌギフデオオヒミダ

ロクジオカクバカイナムネ

ゴサンカイソーボクジッポーハク

ホンナイモトオザイモンジッポク

ナンポウオマヨワサンガイハ

ミヤコアルサトイオモツテ

ジッポーハクホンナイ

イツレガトコロニナンモキタラ

二七ナンシヨ一水キヨキヨウ

ノイツキヨウグワニンスクロウ

ビービーセイサイドーオトモ

ライシオージョラツコク

## 七 まとめにかえて

以上のA B C D四件の報告を通じて要点をまとめておく。いずれも話者の年齢の記載がない。民俗の聞き取りにあたって、話者の生年の確認は重要だが、初対面の相手に生年の質問は身元調査の感じがして尋ねにくいものである。話の流れの中でそれとなく聞けばいいのだが、聞きそびれることもある。右報告にて生年の記載がないのはやむをえまい。

話者が二〇歳で体験(目撃)したとして、大正末期に途絶えた地区では昭和五五年時点では七五歳になっている。昭和三〇年頃に途絶えた地区では、平成三年には七〇歳前後になっている。いずれにしても話者はインタビュア当時七〇歳以上だったと想定してよい。

(1)ネンブツの終了時期 瀬戸山ではAは「昭和五三年頃の聞き取り時点より」二十年前ぐらいまで(昭和三〇年頃まで)とし、Bの岩下(旧郡村)では第二次大戦後もしくはらくはやっていたとする。前掲の写真1には「昭和参拾参年八月」の文字が見える。詞章を記録しようという意図ではなく、自分の備忘のために、すでに誰かが書き留めていたメモを借りて筆写したものと思われる。多くの集落は大正末期頃までに消滅し、いくつかの集落では戦前までおこない、瀬戸山や岩下では全佐多町の中でもっとも遅くまで、戦後十年間ほどは行事が残っていたのである。集落としての行事が途絶えたあと、有志によつ

て何年かは続けられたかもしれない。断絶させるとよくないことが起きると信じられていたはずだからだ。Cの話者はそういう体験者だったのではないか。集落に住む若者は一五歳になって二七組(青年団)に加入し、好き嫌いに関係なく行事に参加した。新参者は歌を覚えるのに苦労したはずだから、詞章をメモした可能性がある。Cの話者はそれをもとに高校生に話をしたのであろう。

(2)実修していた集落 ネンブツを実修していた(一団を組んでまわっていた)ことが記憶されている集落は旧伊座敷村の垂水・瀬戸山・上之園・西方、旧郡村の岩下・川田原・坂元・上村・古里・竹之浦である。自分の集落ではやらないものの一団がまわってきた集落は、旧辺塚村から佐多岬入口の田尻に至るまで佐多郷の全域にわたる。他集落からの訪問があった集落も、以前は自集落で実修していたのではないか。自集落でやってきたからこそ他集落に頼んでまわってきたもらったと思われる。藩政期には旧佐多郷のすべての集落でネンブツ行事をしていたと見ていいだろう。ただし大中尾地区は大正三年の桜島爆発の被災によって移住(二七六戸)してきた開拓集落なので(注7)、ここにはまわっていかなかったようだ。まわってきてくれと頼まれることがなかったのであろう。

(3)畏怖されたネンブツ一行 ネンブツ行事の最大の特徴として、一団の外見も、唱える内容もきわめて異界的・呪術的であったといえよう。Aに「畏怖された」とあるように、ネブツドンと呼ばれた彼らは全員ユカタを着し、笠を被り、ゾウリをはき、杖を突いた。いわば庶民の死装束姿である。それが十数人の集団をなしてやってくる。その光景は異様な雰囲気を出していただろう。よくわからない小声の呪文とともに、妨害するとタタリがあるとして恐れられた。実修する

一団の構成員自身もまたカネの叩き方を間違えるとタタリがあるというので、二七は恐れてカネの叩き役を敬遠し、行事の衰退につながったことがAに出ている。

同時にDにはネンブツ実修の崩壊現象も具体的に語られている。⑧では謝礼金の多少によってサンの内容を変えたという。行事が厳粛さを失った寄付集め手段となっていたことを示している。盆には本来はお寺の坊さんがお経(棚経)をあげに来るのだが、まわりきれないので集落の有志が替わりにお経をあげてまわっているという解釈を、③ではしている。もちろんここでのネンブツは僧侶のおこなう棚経(読経)でなく、お経とは別物である。

(4)サンと六字称名 ネンブツ(ネブチ、ネブツ、ネブツドン)と言いながら、内容は和讃と呪文であって本来の念仏ではない。各サンの最後に「シヨクシンジョーブツナムアミダ(即身成仏南無阿弥陀)」と記されているだけだが、実際はサンの詞章の合間に「ナムアミダブツ」が挿入されていたのではないか。千葉県君津市黄和田畑(きわだはた)でおこなわれた和讃は、本文七五のあとにいちいち「ナムアミダブツ」が挿入されている(注8)。佐多でも本来は同じことがなされてきたであろう。同じことの繰り返しなので、BとCでは記載を省略したと思われる。そうするとサンを唱える時間は倍以上となる。あるいは称名は明治初期の強烈な廃仏毀釈のために脱落させた可能性もないとはいえないが、今となっては確かめようがない。

(5)藩政時代と明治初期の仏教事情 藩政期の『三国名勝図会』に佐多郷の寺院として三寺が記され、『佐多町誌』もそれを転記している。ひとつは真言宗来迎寺(祈願寺)、二つは曹洞宗曹源寺(菩提寺)、三つは真言宗極楽寺。来迎寺は伊座敷の麓にあった。曹源寺は上之園集

落と西方集落の間の山中にあったようだ。極楽寺は南大隅町指定史跡「郡の中世古石塔群」の付近にあり、佐多岬の御崎神社（御崎三所権現社）の別当寺だった（注9）。『佐多町誌』にはもうひとつ、応永年中創建の西福寺が載っているが、位置は不明（のちに知覧に移設）である。これ以外に各集落には小坊や草庵や塔頭などがいくつもあつたはずだが、実態はまったく不明である。隠れ念仏（浄土真宗）については『佐多町誌』には三件の記載があり、うち一件は隠れた場所、二件は法難についてである。藩政期におこなわれていたネンブツ行事は浄土真宗とは見なされず、庶民の盆行事として今述べた四つの大きな寺院からも藩からも黙認されたということであろう。明治の廃仏毀釈については『佐多町誌』にはごく一般論が述べられているだけで廃仏の実際については記載がないが、盆行事一般は衰退したはずで、ネンブツ行事はこれをきっかけとして断絶した集落もあつたはずである。その後いくつかの集落が復活し、断絶した集落は復活集落に訪問を、集落として、あるいは個人として頼んだということであろう。とはいえないかなりの距離のある辺塚へは一戸か二戸から頼まれただけで訪問するとは考えにくいので、地区として依頼したのではないか。

(6) 念仏から和讃へ 念仏（ナムアマミダブツ）を唱えるという行為がいつの時代から民間に広まったのか私には不明だが、全国的には融通念仏が始まったとされる平安時代後期（注10）あたりから徐々に民間に浸透していったのではないか。融通念仏という言葉が示すように個人的な行為としておこなわれたのではなく、グループとしてなされたであろう。集落やグループ（江戸時代には講と呼ばれたようだが）が念仏を唱えたことを示す記念の石造物などの物的手がかりはないものの、大隅半島にも鎌倉期から南北朝期にかけて、まずは融通念仏が流

行し、あとを追いかけるように時衆などの聖の活動によって念仏を唱える行為が弘通してきたと想定していいだろう。近隣で念仏関係の石造物としてはわずかに内之浦町北方に「ナンマンダ」と呼ばれる三基の板碑がある（注11）。精査の必要はあるが、融通念仏または時衆関係の板碑であつた可能性はある。そうした念仏がどのようにしてサンに変化して（サンを取り込んで）いったのだろうか。

(7) サンの種類 Cの四つのサンは、語句の細部には違いがあるがすべてBにもある。つまり佐多全域にてほとんど同じようなサンが唱えられていたのである。新盆供養では新精霊がどういふ人で何歳でどういふ死にかたをしたかによって内容が変わつたようだ。Bによると初盆の家では「釘のサン」、新精霊が幼児の場合は「七つ子サン」をしたという。小学生程度の子供の場合は「ほそなごサン」、若い娘の場合は「花じよサン」や「こはぎサン」などが唱えられた。水祭りに「水のサン」が、薬ともされたお茶に対しては「お茶んサン」を唱えて称揚した。全体としてサンの内容は仏教の功德を説くものだが、いずれも叙事的な物語になっている。詞章は基本的に七五の連続で、BとCでは時々脱落もあるようだ。語句の錯綜（別のサンの詞章の混入など）もあるかもしれない。頭に「キミヨーチヨウライ何々サン」、最後に「シヨクシンジヨーブツナムアマミダ」が付いている。節まわしもカネのリズムもまったくわからないが、母音を引き延ばして歌い、七五のあとには「ナムアマミダブツ」が挿入されたと思われる。全員で合唱したことは確実であろうが、各句はリーダーによるソロと、そのあとを全員で唱和する掛け合いのような形だったかもしれない。全国のと和讃との比較が必要である。

(8) 釘のサン 全国のと和讃の中で佐多と共通するものを今のところ二

曲見いだしている。ひとつは「釘のサン」で、死後全身に釘を打たれる話である。これを四十九日間かけて念仏を唱える(供養する)ことで、すべて抜くことができるという。四十九日の起源譚のような内容だが、発祥地は日光の寂光寺(廃仏毀釈で廃寺)にて作られた「釘抜和讃」であるらしい(注12)。その最初のバージョンと思われる詞章が佐渡の小比叡(こびえい)にて記録されている。(注13)。管見では長野県下伊那郡阿南町の和合念仏踊(盆踊)や愛知県北設楽郡設楽町田峯の盆踊でも歌われている。また『民間念仏信仰の研究 資料編』(注14)には右以外に愛知県知多郡阿久比町植村のものが載っている。いずれも佐多の詞章とは語句がかなり違っている。死後に釘を打たれるが、供養によって一本ずつ抜かれるという筋は同じである。

九州ではまだ見いだしていないが、宮崎県西都市の旧三財村並木に「人は死ぬと生前の悪業によって四十九本の釘を身体に打ち込まれるので、毎日の供養ごとに一本一本抜かれて、苦痛がとかれるため、四十九日間はどうしても供養しなければならぬ。供養しないとその痛みに耐えかね、もがき苦しみ、死者の霊は人にとり憑いて障る」という話が伝えられている(注15)。釘念仏和讃がもとになって生まれた話であろう。細部を変えながら全国に流通していたことがわかる。

(9)七つ子サン 全国と共通するもう一曲は「七つ子サン」である。Bでは幼児が亡くなった時に唱えられるとされるが、内容は、幼くして両親を亡くした子供の哀れを物語っており、涙を誘う。そういう子供は多かったのであろう。詞章の中で「親はなくても子は育つ」という。親はなくても育つ子が僧侶の導きで発心、熱心に両親の菩提を弔うという内容である。九州では宮崎県五ヶ瀬町の荒踊の中で歌われるほか、大分県佐伯市鶴見羽出浦(はいでうら)の盆踊にもある(注

16)。沖永良部島の三十三年忌に歌われる「ミンブチ」は幼くして親に死に別れた男児が、七歳になって母親を訪ねてまわるという話である(注17)。白髪大主前(しらがうふしゆめ)に出会って教えられた通りの供養をし、冥界の母親と会うことができた。しかしいっしょに家に戻ることはできない、まもなくやってくる盆に供養してくれればそれを受け取りましょう…、という内容。白髪大主前はお坊さんの言い換えであろう。沖繩の継母念仏も同系である。亡くなった子供のあの世での苦難を語る和讃がもととあり、親を亡くした子が長じて親を慕い、そして弔うという話にどこかで変形されたのではないか。

以上、佐多のネンブツの詞章を紹介し、九点にわたって気づいたことを述べてきた。具体的には二曲にしか触れることができなかったが、いずれも全国のどこかに同系や類歌があるはずであり、それらを見いだし検討することで大隅半島の先でのネンブツの意義を明らかにできると思う。それを願って本稿を終わる。

## 注

- 1 指導教員はその後鹿児島県歴史資料センターにて民俗全般を担当した川野和昭先生。
- 2 補充調査が平成五年と六年にもおこなわれ、姉妹編として『佐多町民俗資料調査報告書(二) 佐多町の民具』も同時発刊されている。
- 3 天根神社というのは天乙神社のことである。天乙を地元ではテンネと発音する。これを調査者は天根と理解した。村人からはかつては非常に崇りの強い神とされた。祭神は『佐多町誌』によれば彦火火出見尊(山幸彦)というが、謎の多い神社である。鹿児島県神社庁は「アマオツ神社」と呼んでいる。
- 4 『佐多町誌』(昭和四八年) 四三頁。
- 5 民俗調査の際、話者によって話に食い違いが生じることはしばしばある。複数の



- 話者に聞いた上で「たぶんこれが正しい(本来)だろう」と判断して報告するのが普通だが、その判断はあくまで調査者のものである。話者の話の食い違いそのものも考察の対象とするとすれば、こうした食い違いを修正しない報告もありうる。
- 6 上之園から島泊に念仏一行が来たという、その上之園は伊座敷の市街地の南に隣接する水田のある集落で、正月のシバ祭り、祇園祭での太鼓踊、八月十五夜の綱作りなど古い行事を伝えているものの、ネンプツについては昭和初期生まれの上之園在住の年配者もまったく覚えていない。大正末期か昭和初期には自集落での実修も、近隣集落からの訪問も完全に途絶えていたと思われる。上之園・島泊の間の海岸は切り立っているので、標高三百メートルほどの峠を越えるしかなかった。大正十年頃、柳田国男が通っている。そして昭和十五年には宮本常一が同じ道を通った(『大隅半島民俗探訪録』昭和四三年、慶友社)。
- 7 『佐多町誌』(昭和四八年)三四二頁。
- 8 岡部光伸「西上総に伝わる釘念仏信仰について」『智山学報』四三巻(一九九四)に和讀の詞章が掲載されている。これによると七五のあとにナムアマダブツが三回繰り返されている。
- 9 下野敏見「佐多の古代史を考える―民俗と歴史との間―」下野敏見編『佐多町民俗資料調査報告書(1) 佐多町の民俗』(平成七年、佐多町教育委員会)一四頁。
- 10 坂本要「大念仏と民間念仏の系譜」『筑波学院大学紀要』第九集(二〇一四年)七七頁。
- 11 昭和七年の高橋文太郎による「大隅国内之浦再訪記」。これは『日本民俗誌大系』第十巻(一九七六年、角川書店)に収録されている。
- 12 関口静雄「一枚摺の世界 その小釈の試み(3)」『昭和女子大紀要』八九八号(二〇一五年)。
- 13 中川光喜熹「日光山寂光寺釘抜念仏とその伝播について」『歴史と文化』第一〇号(栃木県歴史文化研究会、二〇〇一年)三一頁と三二頁。注8には千葉県君津市のものが載っているが、この佐渡市小比叡のものが原型に近い。
- 14 仏教大学民間念仏研究会編『民間念仏信仰の研究 資料編』(昭和四一年、隆文館)五六九頁。
- 15 田中熊雄「宮崎県の葬送・墓制」『九州の葬送・墓制』(明玄書房、昭和五四年)二七八頁。
- 16 安部弥右衛門「羽出浦の歴史と民俗(七)」『大分県地方史』九六・九七合併号(大分県地方史研究会、一九八〇年三月)。
- 17 三十三年忌の行事については永吉毅『えらぶの古習俗』(昭和五六年、道の島社)一一四頁に説明があり、歌詞が収録されている。奄美や徳之島のシマウタ「マンマ口説」はこの詞章をアレンジしたものである。沖縄では同系の「継母(ままうや)念仏」をチョンダラーが歌って歩いた。